新宿区男女共同参画情報誌

ウィズ新宿

No.116
2013・10

男女がお互いを尊重し、その人らしく生きる。
仕事も暮らしも楽しむ。
そんなあなたを応援する情報誌です。

特集

男女の視点で 防災対策

P3 インタビュー 災害時になぜ女性の参画が必要か
竹信三恵子（和光大学教授）

P5 「防災カフェ」の取り組み

P6 地震だ！その時どうする？

P7 女性の視点で 防災力チェック

P8 講座レポート 「育児ママの再就職応援講座 働き方編」

P9 データウォッチング 「25・3％」 会社で過去3年間にパワハラを受けたことがある人の割合

P9 女と男の食卓風景 「朝ごはん、食べていますか？」

P10 インフォメーション ここ・からまつり開催

特集

男女の視点で防災対策

災害の現場に「女性の参画」が求められています。
災害対策基本法にもその必要性が明記され、
取り組みは徐々に進みつつありますが、
まだまだ現状は不十分です。
災害時には、性別役割分業、不当解雇、
ドメスティックバイオレンスなど、
日常の社会問題が強くあらわれます。
東日本大震災でも、女性が日頃直面している
不平等な慣習や制度が浮き彫りになりました。
また、災害は男女ともにふりかかりますが、
災害対策はどうでしょう。
女性の視点が欠落した「男性まかせ」の対策では、
女性の人権は置き去りにされてしまいます。
こうした課題を解決し、
異なる男女のニーズを反映させるためには、
防災・災害復興にかかわるあらゆる場・組織への
男女の参画が不可欠です。
女性のニーズは女性がきちんと伝える。意思決定もする。
災害の現場において女性も主体者なのです。
今号では男女の視点で考える災害・防災対策について特集します。

新宿駅南口

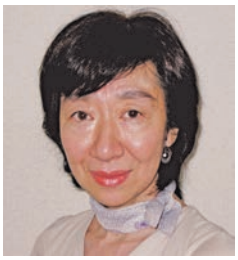
新宿駅西口　滞留者であふれる歩道

写真提供：都政新報社

インタビュー

災害時になぜ女性の参画が必要か

ジャーナリスト、和光大学教授 竹信三恵子



プロフィール◆朝日新聞経済部記者、編集委員兼論説委員を経て現職に。著書に『女性を活用する国、しない国』、編書に『災害支援の女性の視点を！』等。

Q 震災時、女性たちに何が起きていたのでしょうか。

東日本大震災では、あまりの被害の大きさに隠れて、女性たちにどんな問題が起きていたのか、伝えられてきませんでした。

東日本大震災女性支援ネットワークの活動を通して見えてきたのは、女性への配慮に欠けた避難所生活でした。

◆プライバシーが守られない

当初、体育館等の避難所には間仕切りがなく、女性たちは着替えや授乳のたびに人目を気にしなければなりませんでした。

その後、女性の支援者たちが内閣府に申し入れをして間仕切りが支給されましたが、「狭苦しい」「みんな家族だから水臭いことはするな」などの理由から使用されない避難所もありました。

仮設トイレも切実な問題でした。男女別ではなく、喫煙などで男性が集まっている場所や薄暗い場所に設置されていました。絶えず視線や不安を感じながら使用しなければならず、トイレをがまんして体調を崩す女性も見られました。ある女性が改善を申し出ようとしたところ、「男性に苦情を言うと居づらくなる」などの意見が出て実現されませんでした。

◆固定的性別役割分担が強化

「女性だから」という理由で、炊事や清掃当番が当然のように女性全員に割り当てられていました。中には子育てや介護などを抱え、昼間は被災した自宅の片付けや家族の捜索をしながら、疲れきった状態で当番をこなしている女性もいました。日常の性別役割分担が災害時にはより重く女性にのしかかることを感じました。

◆女性や子どもへの暴力

震災直後から女性への暴力も懸念されました。というのも阪神・淡路大震災では、性暴力は虚偽の情報とみなされ、実際には複数の相談が寄せられていたにも関わらず、公式にはなかったとされていたからです。

東日本大震災の際は国が早急に動き、被災地の女性に対する暴力防止を呼びかけました。しかしながら、女性相談に関わったグループからは「夫からの暴力がひどくなった」「支援の見返りに性的関係を強要された」「避難所で隣に寝た男性に身体を触られた」「授乳や着替えをのぞかれた」「子どもが暗がりで襲われた」などの報告があげられています。

災害時に起きている女性や子どもへの暴力は、平常時に社会で起きている暴力と本質的には変わりません。災害時においても女性や子どもに対する様々な暴力が発生するという認識で取り組まなければなりません。

◆雇用不安の拡大

震災時、真っ先に仕事を失うのも女性です。震災直後はパートや派遣労働者、非常勤職員などの雇い止めが加速しました。不当解雇が広がっても、養ってくれる夫や親がいる女性の解雇は仕方のないことと受け止められていました。労働相談に応じた弁護士によると、女性の場合、「話を聞いてもらっただけでもありがたかった」と話すだけで、労使交渉に至る例は少なかったそうです。家族のケアで疲れきり、交渉に踏み切るだけの余力もなかったのだと思われます。

被災地では「心のケアよりも仕事がほしい」という声も多数聞かれました。女性の主な働き場所だった水産加工工場や観光産業の多くは津波で破壊されて、長い間女性が自立できる仕事の求人はほとんどありませんでした。

厚生労働省が発表した岩手・宮城・福島3県の男女別失業手当受給者は、被災前は男女差がほとんどありませんでしたが、震災後の6月時点で、女性の受給者は男性より1万人多い4万5500人に達しています。

Q 避難所で女性のニーズが反映されなかったのはなぜでしょう。

一番の要因は避難所運営の意思決定に

女性が関わっていなかったことです。自治会の長に男性が多いように、避難所のリーダーにもこれまでの慣習で男性が就くケースが多く、女性特有の問題について声を上げづらい状況にあったのです。また、女性にも責任のある役目は男性のほうが適任という意識があり、女性の視点やニーズが取り入れられるシステムが築かれていなかったのです。

前述のとおり、災害時には性別役割分担が強化されるため、女性への負担や男女のニーズの違いに基づいた避難所運営が重要です。日本では大きな震災を経験しながらもこうした視点が欠けており、女性の参画が求められているのです。

いわき市久之浜の被災状況

Q 災害時の男性の問題についてもお聞かせください。

社会に根付く性別役割分担意識は男性にものしかかりました。男は一家の大黒柱として家族を養う責任があるというプレッシャーからうつ病や自殺に追い込まれてしまう例が見られました。

また、被災地では子どもへの虐待が増加し、深刻な問題となっていますが、震災で一人親家庭になった男性の中には、居住環境や仕事が大変なうえに慣れない家事や子育てのストレスが要因となって子どもを虐待するケースもありました。

災害時であっても、女性や子ども、高齢者、障害者などのあらゆる人の人権が尊重されなければなりません。女性の視点で防災対策を考えることは、様々な立場のニーズに対応した誰もが安心して暮らせるまちづくりにつながります。

Q 女性の参画を進めるにはどんなことが大切でしょうか。

過去の災害事例から国の防災基本計画には女性特有のニーズへの配慮や平常時からの男女共同参画の推進が盛り込まれているほか、防災分野への女性の参画の拡大が重点施策の一つにあげられています。

しかしながら、残念なことに、意思決定の場への女性の参画は進んでいません。平成24年4月現在、国の中央防災会議では女性は27人中2人、防災対策推進検討会議では20人中5人とわずかです。地方防災会議における女性委員ゼロの都府県は震災前の12から6に減りましたが、全国の委員総数の女性比率は7・2%にすぎません。

原因の一つに、団体の長を委員とする委員会が多く、こうした地位の女性が極めて少ないことが女性比率を引き下げていることが上げられます。

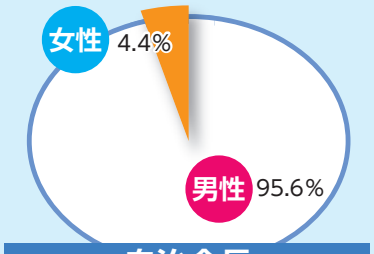
自治体の防災関係者の会合などで、女性の登用を提案しても人材がいないと言われることもあると言います。そこでぜひ実行していただきたいのが、たとえば地域の女性団体が中心となって、女性問題に詳しく、震災支援なども行なっている研究者や女性団体代表などのリストの作成です。

このリストがあれば、登用を求めるときの交渉材料にもなりますし、ネットワークづくりにも役立ちます。地域に女性の声を反映する防災のネットワークを築いておくことは、いざ災害が起きたとき女性が抱えている困難を外に発信し、女性固有のニーズや支援を求める際に大変役立ちます。東日本大震災でも、様々な女性のネットワークが女性支援の大きな力となりました。

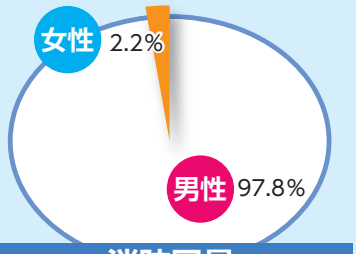
災害時には平常時の様々な社会の課題がより顕著になります。災害に強いまちづくりには、男女共同参画の実現が欠かせません。一人ひとりが日頃から男女共同参画に取り組むことが何より大切なのです。

防災分野における女性の参画状況

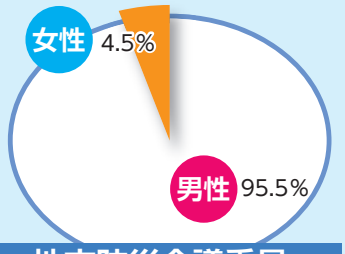
※総数は都道府県合計



自治会長
（総数 232,524人）
出典／内閣府（平成24年現在）



消防団員
（総数 899,555人）
出典／総務省（平成23年現在）



地方防災会議委員
（総数 2,486人）
出典／総務省（平成24年現在）

話し合いの内容を発表する参加者

女性の視点で避難所運営を考え、語り合い、訓練で検証する

防災カフェ

四谷第六小学校避難所 運営管理協議会の取り組み

備蓄倉庫の見学

女性たちが中心となってワークショップを開催

災害時、避難を余儀なくされた際、生活の場となるのが避難所です。東日本大震災でも避難所生活におけるプライバシーの確保など女性への配慮が課題となりました。

新宿区では、災害時、女性や子育て家庭のニーズに配慮した避難所運営に努めるため、平成24年度から四谷第六小学校避難所運営協議会をモデルに女性の視点を取り入れた避難所運営づくりを行っています。

その一つ、「防災カフェ」は、避難所運営協議会の活動の中で様々な立場の方が率直に意見交換する場です。地域住民、学校職員、PTA、スクールコーディネーター、自治体職員などから集まった女性約20名が中心となり、計3回のワークショップを開催しました。

第1回では過去の地震災害の事例をもとに、災害が起きた際、自分たちの避難所等で想定される女性や子どもの問題について意見を交換。第2回では避難所マニュアルを確認したうえで、仮設トイレの設置場所など子どもや女性が安全に避難所生活を送れるかを検証。第3回では課題と対策を検討し、訓練時に何が検証できるかを話し合いました。

女性サポーターによる仮設トイレ組み立て

防災訓練時に女性の視点で検証

さらに、ワークショップで出された意見をもとに、次のような課題と解決案がまとめられました。

◆仮設トイレの見直し→設置場所を玄関付近に変更

◆高齢者のトイレへのアクセス→洋式便器の設置

◆屋上スペースの有効活用→女性専用の洗濯やシャワーなどのスペースを確保

◆足の不自由な高齢者等の対応場所→体育館などに椅子を並べる

◆女性専用スペースとして体育館の活用→ステージにカーテンを引き、着替えや授乳スペースを確保

◆学校内の一部にも女性専用スペースを→一部の教室を女性専用にするなど

◆女性スタッフエリアの設置→専用スペースの設置を検討

このうち、外の仮設トイレの設置位置の変更、体育館などでの高齢者用の椅子の設置、着替えや授乳スペースの設置については、実際に地域防災訓練時に解決方法の検証を行いました。

訓練に参加した防災カフェ、通称よつろく女子会のメンバーからは、

・テント設営や間仕切りの設置などが女性でも対応できるとわかって良かった

・訓練に参加し、避難所での子どもの様子がわかった

・仮説トイレ・テントの組み立てが体験できて良かった

・避難所運営女性サポーターの役割を訓練できて良かった

などの声が聞かれました。

さらに、今年度からは、「つるまき女子会」が発足するなど、女性の視点を取り入れた避難所運営の体制づくりを進めています。

地震だ！その時どうする？

いざというときに備えて、どのように行動するか、日頃からシミュレーションしておくことが大事です。シミュレーションしてみると、避難所に逃げなければという発想から、逃げなくてすむ防災への発想の転換が必要だと気付きます。そのために、普段からどのような対策が必要か考えておきましょう。

震災時のシミュレーション

夫婦共働き 子ども1人の場合（Aさんの場合）		地震発生		夫婦共働き 子ども1人の場合（Bさんの場合）
父：会社 母：会社 子：子ども園（または保育園） ・父母は会社に、子は子ども園に留まり、一晩過ごす 原則、子は保護者の迎えがあるまで子ども園（または保育園）で預かる。園では備蓄品もあり	子ども園	1日目 15:00	子ども園	父：会社 母：会社 子：子ども園（または保育園） ・父母は会社に、子は子ども園（または保育園）に留まり、一晩過ごす 原則、子は保護者の迎えがあるまで子ども園（または保育園）で預かる。園では備蓄品もあり
・父は帰宅困難者に ・電車が動き母親が迎えに		2日目 13:00		・電車が動き母親が迎えに
・母が子どもを引きとり帰宅 ・壁が崩れ、家が住めない状態に 日頃から、防災グッズを用意しておけばよかった	自宅	14:00	自宅	・母が子どもを引きとり帰宅 ・食器や本などが散乱していたが、家は大丈夫 家に被害がないようだ 家具を固定しておいてよかった
・自主的な判断で母と子どもは避難所へ	避難所	15:00		
・食事や毛布が配給される		17:00		・食事は非常用のご飯と缶詰で済ます 非常食を用意していたので助かった
・父と連絡とれず母子は不安な夜 災害の情報が伝わらない		21:00		
父：避難所着、子どもの世話 母：炊き出しの手伝い 炊き出しは女性の役目？		3日目 6:00		・父：交通機関が復旧し自宅へ、家族全員がそろう ・避難所生活は、プライバシーが保たれているのかな？

自宅が倒壊や焼失などの被害がなく安全な場合には、避難所に避難する必要はありません。避難所では限られたスペースで集団生活をすることになり、自宅と同様な生活ができる環境にありません。

区では、震災時に自宅から避難しなくてすむ「災害に強い、逃げないですむ安全なまちづくり」を実現するために、

- **建築物等耐震化支援事業（問合せ…都市計画部地域整備課 ☎5273－3593）**
- **家具転倒防止器具　無料相談・無料設置（問合せ…区長室危機管理課 ☎5273－4592）**を実施しています。

自宅でも過ごせるよう、水や食糧の備蓄など日ごろからの備えが大切です。

女性の視点で 防災力チェック

誰もが安心・安全に暮らせるまちづくりに女性の視点は欠かせません。一人ひとりの行動が地域の防災力にもつながります。女性の視点から心がけておきたい日常の防災ポイントをあげてみました。

☑隣近所に顔や名前を知っている人はいますか？

災害時には地域の助け合いが不可欠となります。いざというとき、自分のことを心配してくれる人間関係を日頃から築いておくことが大切です。仕事が忙しい、単身者であるなどの理由で、なかなか難しい人もいるかもしれませんが、日頃から地域とのつながりを持つことは自分を守る意味でも重要なことです。たとえば、以下の行動を心がけてみましょう。

- あいさつを交わす
- 回覧板の手渡しを心がける
- 積極的に防災訓練、自治会や地域の行事に参加する

☑個人・家族の生活事情にあった備えはできていますか？

ひとり暮らしの方、乳幼児や高齢者のいる家庭など、それぞれの生活事情にあった防災用品を準備しましょう。持出し品は避難生活が長引くことも想定し、体力、健康状態、必要度などに応じて「1次持出し品（最初の避難の備え）」「2次持出し品（3日分の備え）」「3次持出し品（被災生活の備え）」の3段階くらいにわけて準備するとよいでしょう。

東日本大震災を経験した女性たちの報告書では、避難生活が長引いた場合に加えたいリストの一例として以下の物があげられています。

- 生理用品は多めにあると下着を替えられないときに活用できる
- マスクは、顔が洗えないときに重宝した
- 髪が洗えないときに髪の毛をまとめるゴムがあると助かる
- 安全のために防犯ブザーやホイッスルがあると安心できる
- 中身の見えないごみ袋

☑自分の避難所まで歩いてみたことはありますか？

一度、避難所まで歩いてルートを確認しておきましょう。特に小さい子どもや高齢者のいる家庭では、実際の道や所要時間を知っておくと安心です。自分の住む地域の避難場所や避難所は、区が出している「避難場所地図」で確認できます。

また、職場以外の場所で帰宅困難者になった場合には、一時滞在施設や災害時帰宅支援ステーションが利用できます。場所の検索には、東京都防災ホームページの「東京都防災マップ」が便利です。

◆新宿区「あなたのまちの避難場所・避難所」http://www.city.shinjuku.lg.jp/anzen/file03_00022.html

◆東京都防災ホームページ「東京都防災マップ」http://map.bousai.metro.tokyo.jp/index.html

☑災害時の連絡方法は決めていますか？

災害直後の安否確認の方法を家族の間で決めておきましょう。緊急時には案外、公衆電話がつながりやすいといわれていますが、連絡方法はメールと通話の両方を想定しておくとよいかもしれません。被災地では、保育園への連絡は、電話よりもメールの方がしやすかったという報告もあります。また、単身者は、近くに住む友人や同僚と安否確認をするように決めておくことをおすすめします。

◆NTT災害用伝言ダイヤル　171

◆携帯電話各社の災害用伝言板

◆web171（インターネットを利用する災害用伝言板。携帯電話・NTT東西の伝言板共通で一括検索が可能）

◆SNS（Twitter、Facebookなど）

☑女性も防災の担い手として参画していますか？

現在、新宿区でも、行政・企業・地域と連携して防災に強いまちづくりが始まっています。みなさんも学習会を開いたり、消防団や自治会などへの女性の参画を進めたりしましょう。

安全・安心な避難所運営のポイント

1. 女性と男性のリーダーをたてる
2. 間仕切りを設けてプライバシーを確保する
3. 授乳や育児、女性専用の物干しスペースを設ける
4. トイレ、更衣室は男女別に
5. 食事当番など各作業は男女で担う
6. 女性のための相談窓口を設ける
7. リフレッシュできるスペースやイベントを開催する

「育児ママの再就職応援講座（働き方編）」

講師・齋藤あや子氏
（㈱ママジョブ代表取締役）
講師・岡本　薫氏
（厚生労働省指定キャリア・コンサルタント）

出産を機に離職する女性の比率は、約70％にも上るそうです。出産直前まで働いていた女性でも、出産後、再び働き始めることは難しく、専業主婦にとっては、働きたいと思っていても、家事や育児に追われる中で、再就職への第一歩を踏み出すことは簡単ではありません。そんな育児ママ達の「働きたい思い」を応援する講座が、6月19日から子ども総合センターで開かれました。

この講座は、生き方編と働き方編からなります。

生き方編は、自分自身、子どもや配偶者との関わりを見つめ直すためのプログラムで、働き方編は、受講者の「働きたい思い」を形にするためのプログラムです。各日16名の無料託児が0歳児から利用できるとあって、多くの参加がありました。今回は、働き方編の2日間を紹介します。

自分らしい働き方を探して

働き方編の初日午前の部では、まず再就職にあたり、正社員、派遣、パート、在宅労働、プチ起業などの様々な働き方におけるメリット・デメリットについての講義がありました。次に、具体的な働くイメージを持つため、実際に仕事を始めている先輩ママ達の1日のスケジュールの紹介がありました。

その後、各自が家族全体のライフイベント（子どもの進学、住宅、車購入、家族旅行など）とその必要資金を書き出した後、25年先までの1年ごとの支出（基本生活費～住宅費教育費・保険等にライフイベントの支出を足したもの）と配偶者の収入と貯蓄を記入し、各年の年間収支を出したキャッシュフローを作成しました。

こうして、働き方により変わる生活や、今後のライフイベントから必要となる収入を得るための働き方について、受講者一人ひとりがイメージを持ちました。

再就職実践編として

午後の部では、再就職への実践編として、履歴書・職歴書の効果的な書き方と面接を成功させるためのポイントを学びました。履歴書の職歴・経験欄に、ボランティア活動やPTA活動等も記入できることを知ったのは、専業主婦歴が長い筆者にとっては嬉しい発見でした。また、グループワークでの1分間自己アピールでは、将来の再就職に向けた心構えと準備の必要性を実感しました。

プチ起業～好きを仕事にするには

2日目は、短時間のお仕事から始める、自分サイズの小さな起業～「プチ起業」について、心構え、成功するためのポイント、継続に必要なお金の知識などを学びました。

当初、プチ起業を希望している受講者は、あまりいないようでしたが、受講を通じて具体的なイメージが見えてきたことで、プチ起業を視野に入れるという雰囲気になってきました。

子どもの預け先確保の難しさや配偶者の転勤に伴う引越など、専業主婦には再就職への壁が立ちはだかっていますが、プチ起業であれば、一時保育に預けられる時間にだけ働くなど、自分で働く時間を決められるうえ、突然の引越があっても仕事の再開を自分で決められるなど、再就職にはない大きなメリットがあることを理解することができました。

目標に向かって最初の一歩

今回の講座での一番の収穫は、集中して自分自身を掘り下げる時間を持つことができ、自分にとって何が大切か、何が幸せかの自分軸・幸せ軸について深く考える機会を得られたことです。

実際に起業するかしないかにかかわらず、今回の受講内容は、家庭と仕事を両立するための壁や困難を乗り越える大きな助けになってくれると感じました。気づいたこと、感じたこと、考えたことのすべてが、受講者の再就職に向けた最初の一歩になったと言えるのではないでしょうか。

参加者の声

※アンケートより抜粋

- ◆自分のライフイベント表、キャッシュフロー表を書いてみて、いつ、どのように働き始めたらいいのか、見えてきた。
- ◆ワーク作業を通して、いろいろな角度から自分を見ることができた。
- ◆0歳からの託児があり、集中して講座を受けられた。
- ◆面接の際のポイントなど、再就職に必要なノウハウを知ることができた。
- ◆どうすればプチ起業できるのか、具体的に教えていただき参考になった。
- ◆起業の内容など具体的に決まってなく、数字等を書き出すのは難しかったが、より深く考えるきっかけになった。
- ◆プチ起業が第一希望ではなかったので少し戸惑ったが、夢ある未来が想像できた。
- ◆漠然と再就職したいという気持ちで参加したが、現実の厳しさを知ることができた。自分なりのペースで社会と関わっていきたい。

データ・ウオッチング

「25.3%」

会社で過去3年間にパワハラを受けたことがある人の割合

最近、耳にする職場のパワーハラスメント。「職場のパワーハラスメントに関する実態調査」（平成24年度／厚生労働省）では、過去3年間に会社でパワハラを受けたことのある人が25・3%、実に4人に1人がパワハラを受けていることが明らかになりました。

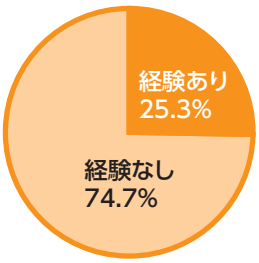
誰もが当事者に

職場のパワハラとは、「同じ職場で働く者に対して、職務上の地位や人間関係などの職場内の優位性を背景に、業務の適正な範囲を超えて、精神的・身体的苦痛を与える又は職場環境を悪化させる行為」をいいます。

たとえば、こんな経験はありませんか？

○ペンを投げつけられた（身体的な攻撃）
○いつでも首にできると脅された（精神的な攻撃）
○自分だけ口を聞いてもらえない（人間関係からの切り離し）
○通常の何倍ものノルマを押し付けられた（過大な要求）
○コピー取りしか担当させてもらえない（過小な要求）
○ことあるごとに彼氏がいるの？　と聞かれ仕事が手につかない（個の侵害）

パワハラを受けたことがある



平成24年度厚生労働省「職場のパワーハラスメントに関する実態調査」

これらは全てパワハラにあたる行為です。また、上司から部下に対する行為と思われがちですが、先輩後輩間、同僚間、さらにはパソコンの得意な部下が苦手な上司に行うなど、様々な優位性を背景に行われるものも含まれます。職場のパワハラは、誰もが当事者になり得る問題なのです。

職場全体にも影響が

パワハラは尊厳や人格を傷つける許されない行為です。こうした問題を放置すれば、被害者は仕事への意欲や自信を失い、心身の健康をも損ないかねません。休職や退職に追い込まれるケースもみられます。

一方、加害者は社内での信用を失うだけでなく、懲戒処分や訴訟の対象になりかねません。さらに、一緒に働く同僚も意欲が低下し、業績の悪化を招くなど、職場全体に悪影響が及びます。企業は貴重な人材を失うだけでなく、問題を放置した場合には裁判で責任を問われる可能性もあります。

パワハラのない職場にしていくには

パワハラの起こりやすい職場の傾向として、以下のような点が指摘されています。

○上司と部下のコミュニケーションが少ない
○残業が多い、休みがとりにくい
○失敗がゆるされない、失敗への許容度が低い

未然に防ぐには、企業は職場のパワハラをなくす、許さないといった方針を明確にし、パワハラが生じない組織文化を育てることが必要です。

近年、パワハラの増加にともない対策に取り組む企業も増えました。そうした企業の多くが「管理職を対象にパワーハラスメントについての講演や研修会の実施」が効果的であったとしています。

互いの価値観などの違いを認め、人格を尊重し合う。互いの違いに気づき理解するためにはコミュニケーションを良くし、風通しの良い環境をつくっていくこと。そんな職場での日頃の心がけが求められます。

ひとりで悩まないでご相談を

新宿区男女共同参画推進センター（悩みごと相談室）
☎03（3341）0801
東京都労働相談情報センター
☎0570（00）6110

女と男の食卓風景

朝ごはん、食べていますか？

夜型の生活で、朝ごはんを食べる習慣のない子どもや若者が増えています。健康で快適な一日を過ごすためには朝食は大切です。味噌汁一杯いただくだけでも違います。

和食の定番、味噌汁の味噌は以外と簡単に作れます。一晩水にひたした500㌘の大豆を茹でてつぶし、塩200㌘と麹750㌘を丁寧にすり混ぜて作る塩麹と一緒に混ぜ合わせ発酵させるだけ。これで手前みその出来上がり。

最近では男性の料理教室への参加も多く、台所に立つ男性も増えてきました。「カジダン」「イクメン」「イクジィ」のみなさん、家族の健康のために一度挑戦してみてはいかがでしょう。

家族とのコミュニケーションが深まる食卓に自前の味噌汁。これ一杯で心もお腹も大満足です。

児童虐待防止推進月間

♪子どもたちの明るい未来のために♪

現在、親などによる子どもの虐待が深刻な社会問題になっています。すべての子どもが虐待を受けずに、健やかに成長できる社会を目指し、国は毎年11月を児童虐待防止推進月間に位置付けています。区では福祉・保健・教育関係の職員を中心に、児童虐待防止のシンボルであるオレンジ色のリボンやネックストラップを着用します。

［問合せ］子ども総合センター
子ども総合支援係
☎3232－0674

第3回 ここ・からまつり開催！

♪みんな集まれ、つながる笑顔♪

すべての世代が集える「新宿ここ・から広場（新宿７－３－29）」は、総合的な子育て支援施設「子ども総合センター」、就労支援の拠点「しごと棟」のほか、高齢者福祉施設「マザアス新宿」や多目的運動広場などがあります。

「ここ・からまつり」は、この広場で開催する、親子連れから高齢者まで楽しめる催しです。友達やご家族、近隣の皆さんとお越しください。

［日　時］11月17日（日）午前10時～午後３時（雨天時は内容等を一部変更）
［主　催］ここ・からまつり実行委員会
［問合せ］子ども総合センター管理調整係（☎3232－0673）、区勤労者・仕事支援センター（☎3208－1450）、区シルバー人材センター（☎3209－3181）、マザアス新宿（☎5285－2530）、まいぺーす（障害児等の放課後・日中活動の場）（☎3232－8801）へ。
［内　容］杉山兄弟によるシャボン玉ショー、ふれあい動物園、うた・ピエロショーのほか体験コーナー、工作コーナー、ゲームコーナー、施設探検スタンプラリー、模擬店などを実施します。

本の紹介

『復興に女性たちの声を「３・11」とジェンダー』

編著　村田晶子／早稲田大学出版部

本書は2011年３月11日に発生した東日本大震災後の支援、復興を探る中での女性達の直面した問題についての考察記録です。

第１章では男女共同参画の視点が復興基本法に反映されるまでの近年の取り組みを紹介。第２章以降は、現地での活動を通して見えたことが記録されています。放射能汚染の反応は「気にする人」「気にしない人」の分断が大きく、問題の複雑さを改めて思わされます。コラム欄では、避難所における助産婦の活動を紹介、女性特有の心身を守るための留意点が具体的に記載されています。活動の主体者だからこその生の声、その力強さが印象的です。被災からの復興の過程で女性達はどのように行動し、どんな壁があったか、気づかされることの多い一冊です。

『もう一人のメンデルスゾーン』

著者　山下剛／未知谷

優れた音楽的才能を持ちながら世に出ることなく生涯を終えたファニー・メンデルスゾーン。その才能は弟メンデルスゾーンをもしのぐものでした。

女性は良き家庭人になることが幸せとされた社会的制約の中で、それに従いながらもファニーは作曲を続けました。

この本はファニーの残した多くの手紙や日記を通してファニーの心情や当時の社会情勢をわかりやすく伝えています。家庭と自分の可能性への挑戦を両立するために苦悩する姿は現代の女性にも通じるものがあります。

女性作曲家がほとんど生まれなかったわけも解き明かされる一冊です。

『いいかげんがいい』

著者　鎌田　實／集英社

日本人は、勤勉で頑張りやというのが定説でした。これまで頑張っている人ほど、まだまだともっと頑張る社会。まさに団塊世代の中には多かったのでは、ないでしょうか。

「いいかげん」を辞書で引くと、ちょうどよい程度のさま、ほどほど。もう１つは投げやり、おざなり、無責任の意味があります。この２つの意味を持つ本書の「いいかげん」は無理をしない、こだわりすぎない、ほどほどに生きることをさしているようです。

それは、今を楽しんで生きるに繋がると著者は訴えています。今、頑張りすぎている人に読んで欲しい、少しほっとする癒される１冊です。

平成26年度子ども園入園児を募集します

◆区立子ども園

募集案内配布　平成25年10月15日（火）から（区立幼稚園の募集も同じ日程で行います）
受付期間　平成25年11月６（水）、７日（木）、８日（金）午前９時～午後５時

３歳児	西新宿（若干名）
４歳児	・四谷（30名）　・あいじつ（40名）　・西新宿（若干名） ☆柏木（８名）　☆おちごなかい（10名）　☆大木戸（３名） ☆しなのまち（２名）　☆戸山第一（４名）　☆西落合（４名）　☆北新宿（４名）
５歳児	各園（若干名）定員から下のクラスからの進級児を除いた人数です

＊☆の子ども園は短時間・中時間保育利用のみの募集です。
＊その他のクラスの入園申込は認可保育園と一緒に行います（11月下旬からを予定）。
※詳細は『平成26年度新宿区立子ども園園児募集案内』をご覧ください。

◆私立子ども園

私立子ども園の短時間利用の募集も行います。詳しくは各子ども園にお問い合わせください。

園　名（設置主体）	所　在　地	電話番号
しんえい子ども園　もくもく（社会福祉法人　新栄会）	高田馬場４－36－12	☎5332－5544
（仮称）東戸山子ども園（社会福祉法人　あすみ福祉会） ※平成26年４月開園予定	戸山２－34－101	☎3978－7170 （新園準備室）

新宿区立子ども園　見学会を行います

区では、就学前の保育・教育を充実させるため、保育園と幼稚園を一体化した子ども園の整備を進めています。区民の皆さんに、子ども園を広く知っていただくため、見学会を実施しています。

【会場・日時】

戸山第一	10月29日（火）	あいじつ	11月18日（月）
大木戸	10月31日（木）	四谷	11月22日（金）
北新宿	11月１日（金）		

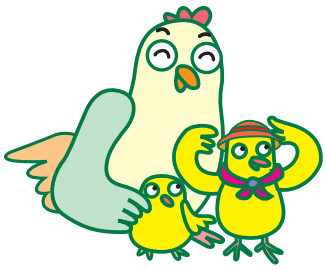
＊いずれも午前10時30分から11時30分

【申込み】見学会前日の午後１時までに電話で子ども園推進課子ども園係（本庁２階）
☎（5273）4047へ（土・日曜日、祝日を除く。）各日15名程度。先着順。
※見学会日時等は広報及びＨＰにてお知らせしております。

子ども園とは…

保育園と幼稚園の機能を合わせ持ち、小学校入学前の子どもに保育と教育を一体的に行うとともに、地域の子育て家庭の支援を行う施設です。

新宿区広報ビデオで子ども園が紹介されています。
http://www.city.shinjuku.lg.jp/video/video0090.html
新宿区ＨＰの子ども園のページも合わせてご覧ください。
http://www.city.shinjuku.lg.jp/kodomo/index04_0703.html



【問合せ】
子ども園推進課☎5273－4047

若者のつどい
開催のお知らせ

クリス・ハートさん

ジェフ・ミヤハラさん

【日時】
平成25年11月19日（土）
午後１時～４時30分
（午後０時30分開場）

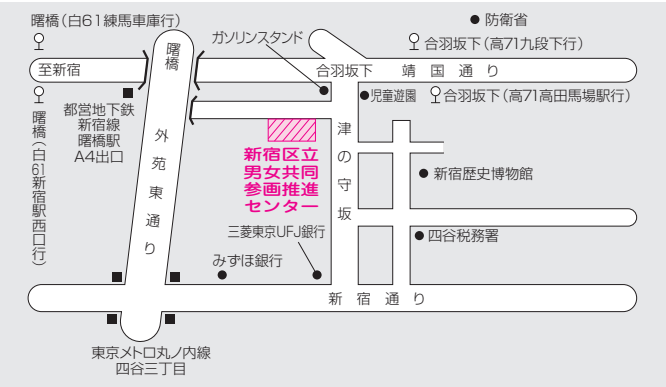
【会場】
新宿文化センター（新宿６-14-１）

【主な内容（予定）】
- スペシャルゲストのステージ
  （ミニライブ＆トーク）
  クリス・ハートさん
  ジェフ・ミヤハラさん
- 早稲田大学・森川友義教授のモテ講座
- 出会い・懇親の場
- えんにち、カフェ
- ライフ＆マネープラン講座等

平成25年度
男女共同参画フォーラム
開催のお知らせ

【日時】
平成26年２月15日（土）
午後１時30分～４時
【会場】
四谷区民ホール（内藤町87）
【主な内容（予定）】
菊池桃子さんの講演　等

菊池桃子さん



発　行　新宿区子ども家庭部男女共同参画課
新宿区立男女共同参画推進センター
〒160-0007　東京都新宿区荒木町16番地
TEL（3341）0801　FAX（3341）0740

発行日　平成25年10月30日

116号の編集を終えて

東日本大震災から早や３年。決してみんなが忘れてはいけない惨事です。女性ならではの視点で、防災について真剣に考えてみました。非常時にもっとも大切で必要なものとは？安心・安全を第一に考え、身を守るには？　災害時には、特に弱い者が被害を一番に受けやすい状況になるのが現状です。いざという時に、必ず役立つ記事になるようにと取り組みました。（市川　秀子）

「女性が安心して生活するために女性リーダーの存在が重要だ」というのは当然なのかもしれませんが、私には新鮮でした。東日本大震災後の避難生活について調べ、女性が意見を出しにくい状況や背景を知りました。災害時には日常の制度･慣習が浮き彫りになるということですが、もっと日頃の生活に対しても意識を向けたいと思います。（逢坂　弥生子）

自然災害の被害の大きさにはおののくばかりです。明日は我が身。備えはできているだろうか。特集では、各地の防災委員会にほとんど女性がいないことに驚きました。災害に関するあらゆる場において、女性が参画できるような仕組みづくりと女性が自らすすんで発言・行動し役割を担っていくことの大切さを知りました。意識を変えよう。いつかくるかもしれない「その時」のために。（大槻　かおり）

私は、毎年町会の避難訓練に参加しており、子供たちとも地震について話し合ってきているので、避難所や防災対策についての知識は十分という自信がありました。しかし、今回、災害時の悲惨な実態を知り、女性や子供の安全という視点から、あらためて現在の防災対策を見直してみると、まだまだ足りないことや考えておかなければいけないことが見つかりました。今号が、本当に必要な防災対策を準備するきっかけになればうれしいです。（奥村　文子）

今回の特集で一環してあったのが新宿区という地域に視点をおいて考える姿勢で、資料等から得た情報に血を通わせる作業でした。担当しましたデータウォッチングでは、パワハラは力（権力）を嵩にしたもので、断固とした態度が必要だと意を新たにしました。編集は何をどのように伝えるか、難しいけれどおもしろい。次号も頑張ります。（加藤　秀子）

災害時に起こることは、普段から多くのことを知っておくとよいですね。しかし、実際に災害が起きた時には、多くのことを一度に行うのは困難です。地震がおきた際のシミュレーションでは、想定される問題点をに吹き出しであげてみました。１つでも多く対応できるような手助けになれば、幸いです。（木村　健二）

災害規模が大きいほど、その被災ストレスは女性をはじめ弱者に向かうという現状。その深刻さを特集編集を通じて痛感しました。災害現場での女性の参画は必須であると、改めて考えさせられました。自身が直面する現実として、日常を見直す契機となれば嬉しく思います。（新本　理英）

伝えたい思いがあり編集委員に応募しましたが、苦手な科目が国語だったことに気づかされ後悔の日々でした。今回のテーマである防災は、想定した訓練や準備も重要で、自分の身は自分で守る心構えも大切なんだと思いました。また、震災後いまだに避難生活を強いられている方々の思いや、被災地の“今”現状も忘れてはならないと改めて感じました。（鈴木　順子）

今回の特集に携わって初めて大震災の下で女性が直面していた困難を知り大変ショックを受けました。その衝撃を私の回りの人たちに話すとみんな驚いていました。私もそうでしたが、ほとんどの人はどのようなことが起こっていたか知らないと思います。１人でも多くの人が話題にしてくれることが問題解決の第一歩につながると考えます。（吉山　博子）

この印刷物は再生紙を使用しています。